

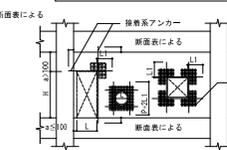
構造特記仕様書（2）		第四章 仮設工事		h) カプセル型 樹脂接着系アンカーは、施工業者の責任において工事検査・試験を行う。 現場施工されたアンカー本体または、アンカー筋が適正に固着されているか否かを、監督員立合いの全数打音検査によりその固着度を確認する。また、必要に応じて引張試験により固着力を検査する場合は、原則として各層3本以上、かつ、補強部材1カ所あたり1本以上について実施する。尚、試験法は、J C A A の耐震改修用あと施工アンカーの現場試験方法による。 アンカーごとの確認張力は下表による。（設計強度の2 / 3程度）																													
第三章 材 料		<p>(1) 工事期間中に一般使用が考えられる場合は、工事箇所周囲に仮囲等を設け工事関係者以外の工事箇所立ち入りを防ぎ安全を図る。また、工事関係車両及び一般使用者との出入口を明確に分ける。特に児童の行動を十分予測し、児童の安全性を確保する。</p> <p>(2) 工事にあたり施工性の上と安全性の確保を図ると共に騒音、粉塵等の対策を十分に考慮して施工すること。</p> <p>(3) 工事に先立ち、施設側と十分連絡を取り、足場、資材の搬入路、ストックヤード、駐車場等をまとめた「総合仮設計画書」及び工程表を作成し、監督の承認を得ること。</p> <p>(4) 既存部材の仕上げ材及び機具類に損傷を与えないよう十分注意し、必要に応じてシート等で養生する。</p>		<table border="1"> <thead> <tr> <th>位 置</th> <th>径</th> <th>設計強度</th> <th>確認張力</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>補強躯体</td> <td>D10</td> <td>20.9 kN</td> <td>13 kN</td> </tr> <tr> <td>補強躯体</td> <td>D16</td> <td>47.2 kN</td> <td>32 kN</td> </tr> <tr> <td>補強躯体</td> <td>D22</td> <td>133.5 kN</td> <td>89 kN</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		位 置	径	設計強度	確認張力	補強躯体	D10	20.9 kN	13 kN	補強躯体	D16	47.2 kN	32 kN	補強躯体	D22	133.5 kN	89 kN												
位 置	径	設計強度	確認張力																														
補強躯体	D10	20.9 kN	13 kN																														
補強躯体	D16	47.2 kN	32 kN																														
補強躯体	D22	133.5 kN	89 kN																														
<p>1. コンクリート (N/mm²)</p> <p>コンクリートはレディーミクストコンクリートを使用し下記による。</p> <p>a) 設計基準強度 2 1 N/mm² * 設計基準強度に3 N/mm² 割増す。</p> <p>b) セメント 普通ポルトランドセメント (JIS R 5210)</p> <p>c) 粗骨材最大寸法 2 0 mm以下</p> <p>d) スランブ 1 8 cm(許容差は監督員の協議による。)</p> <p>e) 水セメント比の最大値 6 5 %</p> <p>f) 単位セメント量の最小値 3 0 0 kg/m³</p> <p>g) 塩化物イオン量 0. 3 kg/m³ 以下</p> <p>h) A E 剤等を用いるコンクリートの所要空気量の目標値は4. 5 % (4 ~ 5 %内) とする。</p> <p>i) コンクリートの練混ぜから打込み終了までの時間は、外気温が2 5 ℃以下の場合 は 1 2 0 分、2 5 ℃を超える場合は9 0 分とする。</p> <p>j) コンクリートの強度試験回数は、1日1回以上かつ1日の打設コンクリート1 5 0 m³ ごと及びその端数につき1回以上とし、1回の試験の供試体の数は、試験の目的等必要に応じて、それぞれ3個とする。</p> <p>調合強度の管理試験においての供試体は、任意の1運搬車から、構造体のコンクリート強度の推定試験の供試体は、無作為に選んだ運搬車等から1個分ずつの試料を採取し、製作する。</p> <p>k) 普通コンクリートは、JIS A 5308によるJ I S 表示認定工場で製造されたコンクリートとする。</p> <p>l) 膨張混和材の使用にあたっては、JIS A 6202に適合したものを用いるほか、日本建築学会「膨張材を使用するコンクリートの調合設計・施工指針案・同解説」によるものとする。</p>		<p>第五章 撤去工事</p> <p>(1) 耐震壁等の増設に伴い、これらの増設部材が設置される箇所の既存仕上げ、躯体及び土間等の一部を撤去する。コンクリート及び塗り仕上げを部分的に撤去する場合は、既存部分の仕上げに損傷を与えないよう十分注意する。特に、塗り仕上げ、増設部材設置構面内の壁コンクリート及び土間コンクリート等の撤去に際しては、カッター等で切り込みを付け、既存部分の保護をはかる。</p> <p>(2) 増設部材と接する既存コンクリート面は、十分に目荒らしを行い、増設部分との一体化を図る。既存柱・梁には平均深さで0. 5 ~ 1. 0 cm (最大で1. 0 ~ 1. 5 cm) 程度の凹面を、打継ぎ面の3 / 4 の面積以上となるように全体にわたって施す。(増打ち増設壁の場合には1 / 3程度を目安とする。)</p> <p>(3) はつり工事は、構造躯体に悪影響を与えない方法で丁寧にすること (電気ビック、ハンドブレーカー等を用いる)。 塗り仕上げまたはこれに準ずる仕上げ材及び躯体を撤去する場合は、両面からカッターで切り込みをつけてから撤去する。</p> <p>(4) コンクリート打設前には粉塵、はつり、がら等を清掃し、数日前から水湿めを行う。 発生材は全て場外処分とし「産業廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づき適正に処分すること。</p> <p>(5) 既存の躯体状態の確認及び必要と認められる場合は、適宜補修すること。</p> <p>(6) 復旧に再使用するものは、十分注意して取り外し、傷められない場所に仮置する。</p>		<p>(注記) ・固着力検査の結果、不合格となった場合の対処は監督員の指示によるものとする。 ・アンカーが鉄筋に当たった場合や斜め打込み、穿孔を失敗した穴等の取り合いは監督員の指示に従う。 ・地中梁等の増打がある場合は、コンクリート打設前に引張試験を行うこと。</p> <p>(3) 配筋はその端部が既存コンクリートの表面から5 cm以内になるように配置する。又、継ぎ手は重ね継ぎ手又は、フレア溶接とする。</p> <p>(4) 型枠は一般の型枠とは異なり周辺既存部材との接続となる為、コンクリート打設時に型枠の移動が生じたり、セメントペーストが流出する恐れがあるのでモルタル、シール又はパッキン等を用いて隙間を埋める。</p> <p>(5) 既設コンクリート部材表面のはつり又は圧さく空気、吸引機、掃除機あるいは水などで十分に清掃し、水湿しを行い打込み前にはせき板、既設コンクリート中の水分が吸引されないようにする。</p> <p>(6) 打込みは、下からの圧入や上階スラブに打込み用開口部を設けて打込み面が水平になるように注意しながら行うなど確実な方法による。 増設する部材と既設の上部架構とを一体化するよう、上部に高さ2 0 cm程度の空間を残し、グラウト圧入を行う。</p> <p>(7) コンクリートの締固めは、タキ締め、バイブレーター等を用いて密実なコンクリートとする</p> <p>(8) コンクリートには、膨張性の混和材を添加するのでコンクリート強度の発現中(7日間程度)は十分な湿潤養生を行う。又、養生期間中は、振動等を与えないように注意する。 (膨張性混和材は、メーカーの管理において生コン工場で混和する。)</p> <p>(9) グラウト工事(責任施工)は次の各項を厳守すること。 a) 事前に詳細な施工要領書を監督員に提出し承諾を得る。 b) 打ち込み前に、既存コンクリート表面及びコンクリート打ち継ぎ部の清掃及び水湿を十分に行う。 c) 圧入に先立ち試し練りを行う。施工時には水湿の管理を十分にを行い、水温1 0 ℃以上の水を用いて無収縮モルタルを練り上げ、練り上り時間の温度が1 0 ~ 3 5 ℃の範囲のものを適切な圧力で中断しないよう圧入する。 d) 1回の圧入の区画を定め、かつそれに見合うよう諸機械器具を計画し、空気抜きを設け、グラウトモルタルが空気抜きに出てくることを確認する。 e) モルタルグラウト型枠の取り外しは、7日を経てからとする。圧縮強度が設計基準強度の3分の2(2 0 N/mm²) 以上あることが確認できた場合はこの限りではない。 f) 施工時及び養生期間中(7日間以上)は、常に湿潤状態を保ち、圧入モルタルの温度5 ℃以上を保つ。 g) 圧入モルタル硬化中は圧入口、空気抜きパイプ等の密栓(バルブコック)を確認し、有害な衝撃振動を与えない。</p>																													
<p>2. グラウトモルタル</p> <p>グラウトモルタルは早強型 特殊セメント系無収縮モルタルとし、調合はプレミックスとする。</p> <p>a) 設計基準強度 3 0 N/mm²</p> <p>b) 圧縮強度試験方法の準拠規格はJ I S A 1 1 0 8とする。</p> <p>c) 施工業者の責任において試験表を作成し、公的機関で試験を行う。試験は1日施工毎にJ 1 4 ロート試験を行い、圧縮試験体を作製する。試験体は、径5 0 mm、高さ1 0 0 mmの大きさとし、材令2 8 日3本とする。コンシステンシー試験は、J 1 4 ロート試験に準ずる。</p> <p>d) グラウトモルタルは製造所の製品とし、標準的な使用量はその仕様による。</p>		<p>第六章 鉄筋コンクリート造増設工事</p> <p>(1) 壁配筋・型枠等の材料加工に先立ち既存躯体寸法を測し、これらの納まりが確実になるよう十分注意する。</p> <p>(2) あと施工アンカー工事(責任施工)は次の各項を厳守すること。 a) アンカーはカプセル型 樹脂接着系アンカーとし、使用実績が多く信頼性が高い物を用いること。 b) コンクリートドリルの径は樹脂系アンカーに適したものを使用し、穿孔を行う前に部材幅方向に溝はつりを行う。 c) 既存鉄筋及び埋設管の位置を確認してそれらの位置を避けて穿孔する。尚、鉄筋探査等の方法により、既存鉄筋及び埋設管の位置が的確に把握できる場合にはこれらの方法を用いてよい。 d) 穿孔時には周辺のコンクリートに損傷を与えないように注意する。又、既存コンクリート内の鉄筋に当たった場合の対処及びダメ穴の処理は監督員と協議する。 e) 穿孔時に生じる切り粉は念入りに清掃する。必ず専用のブラシを用い穴側面の切り粉を除去し、埋め込む。 又、硬化養生中にボルト脱落あるいは樹脂の流出が予想される場合は脱落防止、流出防止の処理を講ずる。樹脂が硬化するまで外力を与えず、24時間以上常温(5 ℃以上)で養生する。 g) 施工上生じる問題はすべて監督員と協議の上実施すること。</p>		<p>(3) 配筋はその端部が既存コンクリートの表面から5 cm以内になるように配置する。又、継ぎ手は重ね継ぎ手又は、フレア溶接とする。</p> <p>(4) 型枠は一般の型枠とは異なり周辺既存部材との接続となる為、コンクリート打設時に型枠の移動が生じたり、セメントペーストが流出する恐れがあるのでモルタル、シール又はパッキン等を用いて隙間を埋める。</p> <p>(5) 既設コンクリート部材表面のはつり又は圧さく空気、吸引機、掃除機あるいは水などで十分に清掃し、水湿しを行い打込み前にはせき板、既設コンクリート中の水分が吸引されないようにする。</p> <p>(6) 打込みは、下からの圧入や上階スラブに打込み用開口部を設けて打込み面が水平になるように注意しながら行うなど確実な方法による。 増設する部材と既設の上部架構とを一体化するよう、上部に高さ2 0 cm程度の空間を残し、グラウト圧入を行う。</p> <p>(7) コンクリートの締固めは、タキ締め、バイブレーター等を用いて密実なコンクリートとする</p> <p>(8) コンクリートには、膨張性の混和材を添加するのでコンクリート強度の発現中(7日間程度)は十分な湿潤養生を行う。又、養生期間中は、振動等を与えないように注意する。 (膨張性混和材は、メーカーの管理において生コン工場で混和する。)</p> <p>(9) グラウト工事(責任施工)は次の各項を厳守すること。 a) 事前に詳細な施工要領書を監督員に提出し承諾を得る。 b) 打ち込み前に、既存コンクリート表面及びコンクリート打ち継ぎ部の清掃及び水湿を十分に行う。 c) 圧入に先立ち試し練りを行う。施工時には水湿の管理を十分にを行い、水温1 0 ℃以上の水を用いて無収縮モルタルを練り上げ、練り上り時間の温度が1 0 ~ 3 5 ℃の範囲のものを適切な圧力で中断しないよう圧入する。 d) 1回の圧入の区画を定め、かつそれに見合うよう諸機械器具を計画し、空気抜きを設け、グラウトモルタルが空気抜きに出てくることを確認する。 e) モルタルグラウト型枠の取り外しは、7日を経てからとする。圧縮強度が設計基準強度の3分の2(2 0 N/mm²) 以上あることが確認できた場合はこの限りではない。 f) 施工時及び養生期間中(7日間以上)は、常に湿潤状態を保ち、圧入モルタルの温度5 ℃以上を保つ。 g) 圧入モルタル硬化中は圧入口、空気抜きパイプ等の密栓(バルブコック)を確認し、有害な衝撃振動を与えない。</p>																													
<p>3. 鉄筋等</p> <p>鉄筋は、J I S G 3 1 1 2 (鉄筋コンクリート用棒鋼)の規格品とする。</p> <p>a) 壁筋・補強筋等 S D 2 9 5 A (D 1 6以下) S D 3 4 5 (D 1 9以上)</p> <p>b) スパイラル筋 S D 2 9 5 A (D 6)</p> <p>c) アンカー筋 S D 3 4 5 (頭部はネジ切り加工をしてナット取付け、先端4 5 °カット)</p> <p>あと施工アンカーは、(社)日本建築あと施工アンカー協会(J C A A)に加盟する製造所の製品とし、J C A A が規定する品質基準に適合しているものを用いる。また、メーカーがその製品に対して品質を保証している期間内にあるものを用いる。</p>		<p>株 式 会 社 海 渡 設 計 一 級 建 築 士 事 務 所 福岡県和歌山県福岡1-30027号 代表取締役 野田知伸 管理建築士 神崎信二 一級建築士 第32307号</p>		<p>工 事 名 称 総合福祉会館改修工事</p> <p>項 目 名 称 構造特記仕様書(2)</p> <p>期 間 4.1 - 4.3 -</p> <p>日 付</p>																													
<p>4. 鋼材等</p> <p>a) 鋼材は、J I S G 3 1 0 1 に規定されているSS 4 0 0 規格品以上とする。</p> <p>b) 頭付きスタッドは、J I S B 1 1 9 8 に規定されている規格品とする。</p> <p>c) 高力ボルトは、トルシア型 高力ボルト(S 1 0 T) 又は、F 1 0 Tとする。</p> <p>d) ターンバックルは、J I S A 5 5 4 0 (建築用ターンバックル)に規定されている規格品とする。</p> <p>e) 溶接材料は下記による。</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>被覆アーク溶接棒</td> <td>J I S Z 3 2 1 1 (軟鋼用)</td> <td>規格品</td> </tr> <tr> <td>ガスシールドアーク</td> <td>J I S Z 3 3 1 2 (軟鋼用)</td> <td>規格品</td> </tr> <tr> <td>溶接用網ワイヤー</td> <td>J I S Z 3 3 1 3 (軟鋼用)</td> <td>規格品</td> </tr> </tbody> </table>		被覆アーク溶接棒	J I S Z 3 2 1 1 (軟鋼用)	規格品	ガスシールドアーク	J I S Z 3 3 1 2 (軟鋼用)	規格品	溶接用網ワイヤー	J I S Z 3 3 1 3 (軟鋼用)	規格品	<p>5-02</p>																						
被覆アーク溶接棒	J I S Z 3 2 1 1 (軟鋼用)	規格品																															
ガスシールドアーク	J I S Z 3 3 1 2 (軟鋼用)	規格品																															
溶接用網ワイヤー	J I S Z 3 3 1 3 (軟鋼用)	規格品																															

耐震補強基準要領

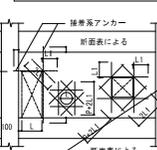
壁断面表

符号	壁厚	主筋 たて、よこ筋	接合筋	壁開口種別				引張補強スライラ筋		破綻で示す開口種別		備 考	
				L.H < 1,000		L.H ≧ 1,000		数	スライラ筋径	たて・よこ筋	ななめ筋		有効埋込長さ(L)
				たて・よこ筋	ななめ筋	たて・よこ筋	ななめ筋						

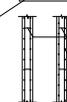
壁の開口種別差違（鉄筋終りの場合）



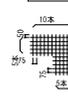
壁の開口種別差違（鉄筋の途中）



鉄筋の差違



鉄筋終り



- 鉄筋終りの間隔は、 $\phi 75 \times 75$ とし露出側に鉛直し最小埋り長さ（30mm以上）を確保する。
- 壁開口種別差違と既存躯体との取合いは、接着高アンカーを使用し、壁開口種別差違と同定する。
- 開口最大径が200mm以下の場合は補強筋不挿入。
- ϕ の寸法が100mm以下の場合は補強筋不挿入。
- 補強筋は、規定配筋以外に入れる。
- L.Hが20とする。
- 開口ピッチは（壁除く開口部以外の平均）以上を原則とする。
- 鉄筋を挿入するスライラ筋は下部の開口部で行う。但し、鉄筋の位置や形状が不適当な場合は必要に応じて補強筋を挿入し、必要配筋率を十分確保すること。
- 新設する耐震壁を構築する電気・機械設備工事のスライラ筋の取組の入れ方
 - スライラ筋の大きさ 1) 所当たり1000 (2) 規格以下とする。
 - スライラ筋の張 1) 縦横各2方向に2方向程度とする。
 - スライラ筋のピッチ 4) (2) スライラ筋の外径寸法) 以上かつ 200mm (3) ϕ 以上とする。
- へりあき寸法 出入り口等の間から400mm (3) ϕ 以上とする。

- はしあき寸法
 - 開口種別
 - その他
- イ) 新設する耐震壁を構築する電気・機械設備工事のスライラ筋は原則として認めない。
- ウ) 鉄筋の新設壁を構築する電気・機械設備工事のスライラ筋の取組の入れ方
- スライラ筋の大きさ 1) 所当たり1000 (2) 規格以下とする。
 - スライラ筋の張 1) 縦横各2方向に2方向程度とする。
 - スライラ筋のピッチ 4) (2) スライラ筋の外径寸法) 以上かつ 200mm (3) ϕ 以上とする。
 - へりあき寸法 出入り口等の間から400mm (3) ϕ 以上とする。
 - 開口種別
 - その他
- エ) 壁開口種別差違の接着高アンカーのピッチは7.5daとする。

- 柱、梁、床スラブ上層から300mm (3) ϕ 以上とする。
- 不挿入。
- 引張補強スライラ筋取組は部分で行う。
- 鉄筋は終りにしないこと。

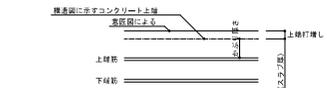
鉄筋のかぶり厚さ

(a) 鉄筋及び溶接金網の最小かぶり厚さ及び設計かぶり厚さは、表0.4による。ただし、柱及び梁の主筋に20以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを壁の1.5倍以上として最小かぶり厚さを定め、設計かぶり厚さは最小かぶり厚さに10mm加えた値とする。

表0.4 鉄筋の最小かぶり厚さ及び設計かぶり厚さ

構造部分の種類	最小かぶり厚さ		設計かぶり厚さ		
	最小	最大			
土に接しない部分	スラブ	柱上げあり	20	25	
		柱上げなし	30	35	
	柱	壁内	柱上げあり	30	40
			柱上げなし	30	40
		壁外	柱上げあり	30	40
			柱上げなし	40	50
土に接する部分	柱、梁、スラブ、壁	*40	50 (45)		
	基礎、基礎、耐圧スラブ	*60	70		
	建築設備熱を伝える部分	60	70		

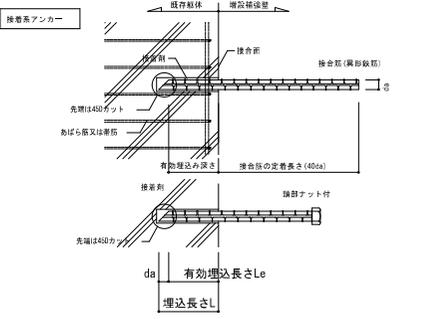
- 上表のうち、()内はスラブの場合とする。
- *印のかぶり厚さは、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートの場合は、10mmを加えた数値とし、打増しにより確保する。
- 「柱上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、鉄筋の断面に有効でない柱上げ（土上層、农村付又は基礎等）のものを除く。
- スラブ、梁、基礎及び基礎で、直接土に接する部分のかぶり厚さには、地コンクリートの厚さを含まない。
- 杭基礎の場合のかぶり厚さは、杭天端からとする。
- 埋管を穿けるおそれのある部分等、耐久性上不利な箇所は、設計による。
- ひび割れ発生が危ない箇所については最小かぶり厚さを満足させる。
- スラブ仕上げの場合は20.5以上とする。



- スラブ柱上げの場合は、打増しを行う。
- 打増し法は裏面図による。

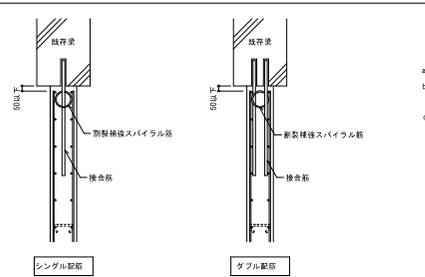
あと施工アンカーの形状と接合筋

注) 有効埋込み深さは、あばら筋又は筋外周からかぶり厚さを加えた部分からの寸法とする。

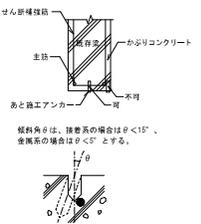


	せん断用アンカー	引抜き用アンカー
有効埋込長さ (Le)	7da	10da
埋込長さ (L)	8da	11da

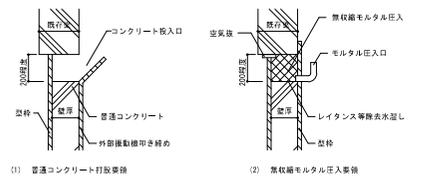
あと施工アンカー要領図



- あと施工アンカーは、柱・梁の主筋の内側に施工する。(右図参照)
 - アンカーを打設する既存のコンクリートにジャンカ等がある場合には、修繕と協議して適切に処置する。
 - 鉄筋等の挿入
- あと施工アンカーは、鉄筋の埋込み物類を避けて施工する必要がある。埋設鉄筋等の確認は次に要する。
- 鉄筋深知識により確認する。
 - 鉄筋深知識で確認できない場合は、体つりを行い、埋設の鉄筋、埋設物の位置を確認する。

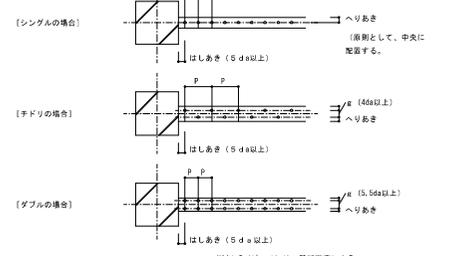


コンクリート打込み工法（流し込み工法）



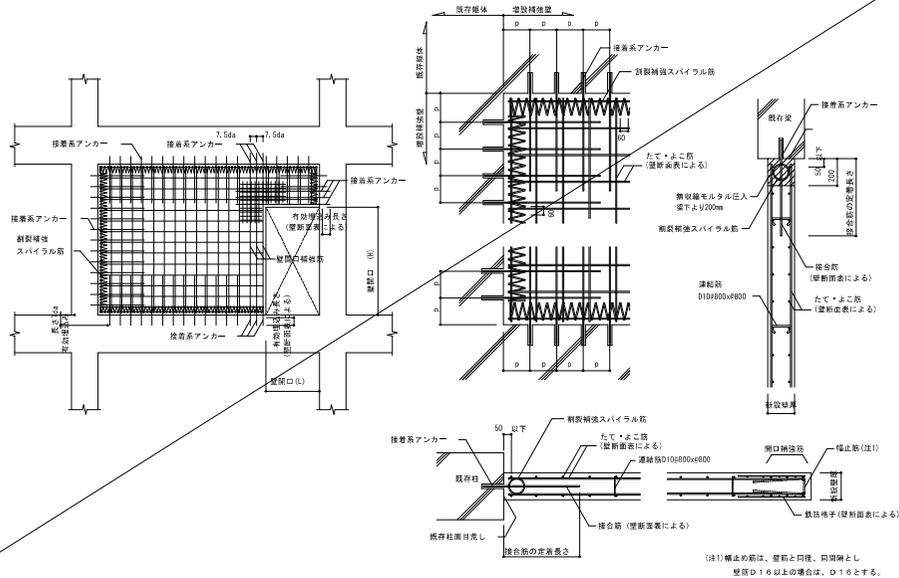
- コンクリート打込み要項
 - 1) 10mm普通コンクリート施工後
 - 2) 空気抜きおよびモルタル圧入入口

あと施工アンカーの位置と間隔



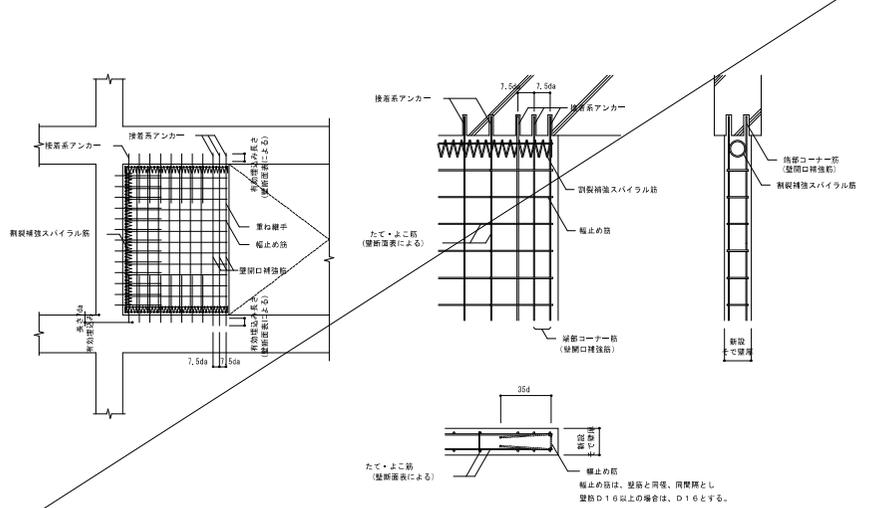
RC1 新設壁要領図

(注) 1. あと地アンカーの有効埋込み深さは7daとする。



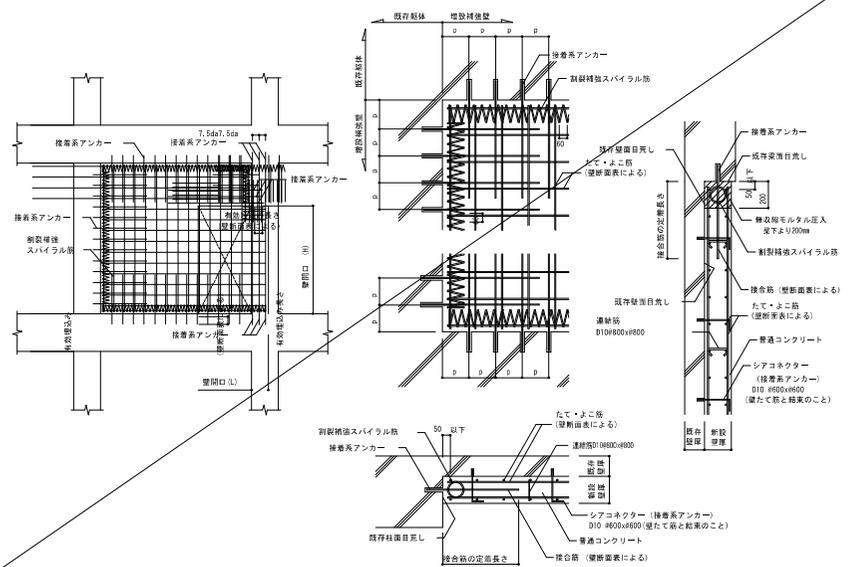
RC3 新設袖壁要領図

(注) 1. あと地アンカーの有効埋込み深さは7daとする。

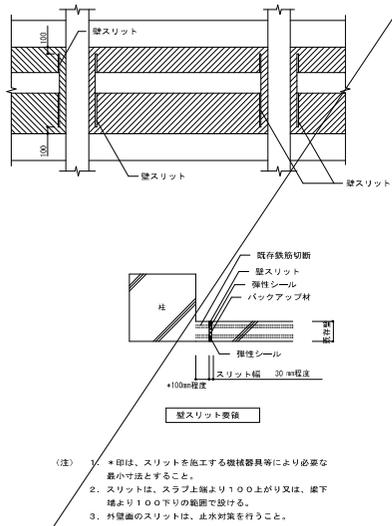


RC2 既存壁に増打ち壁要領図

(注) 1. あと地アンカーの有効埋込み深さは8daとする。

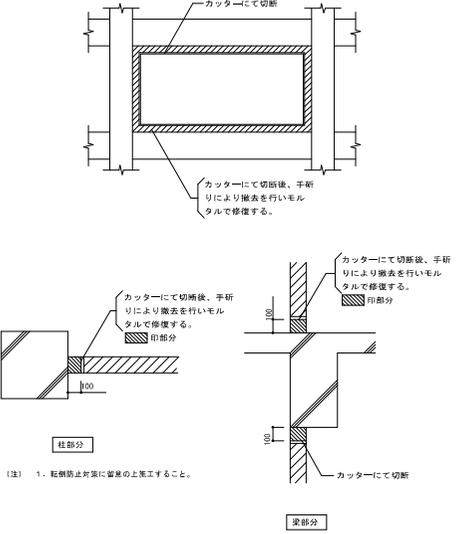


RC4 壁スリット要領図

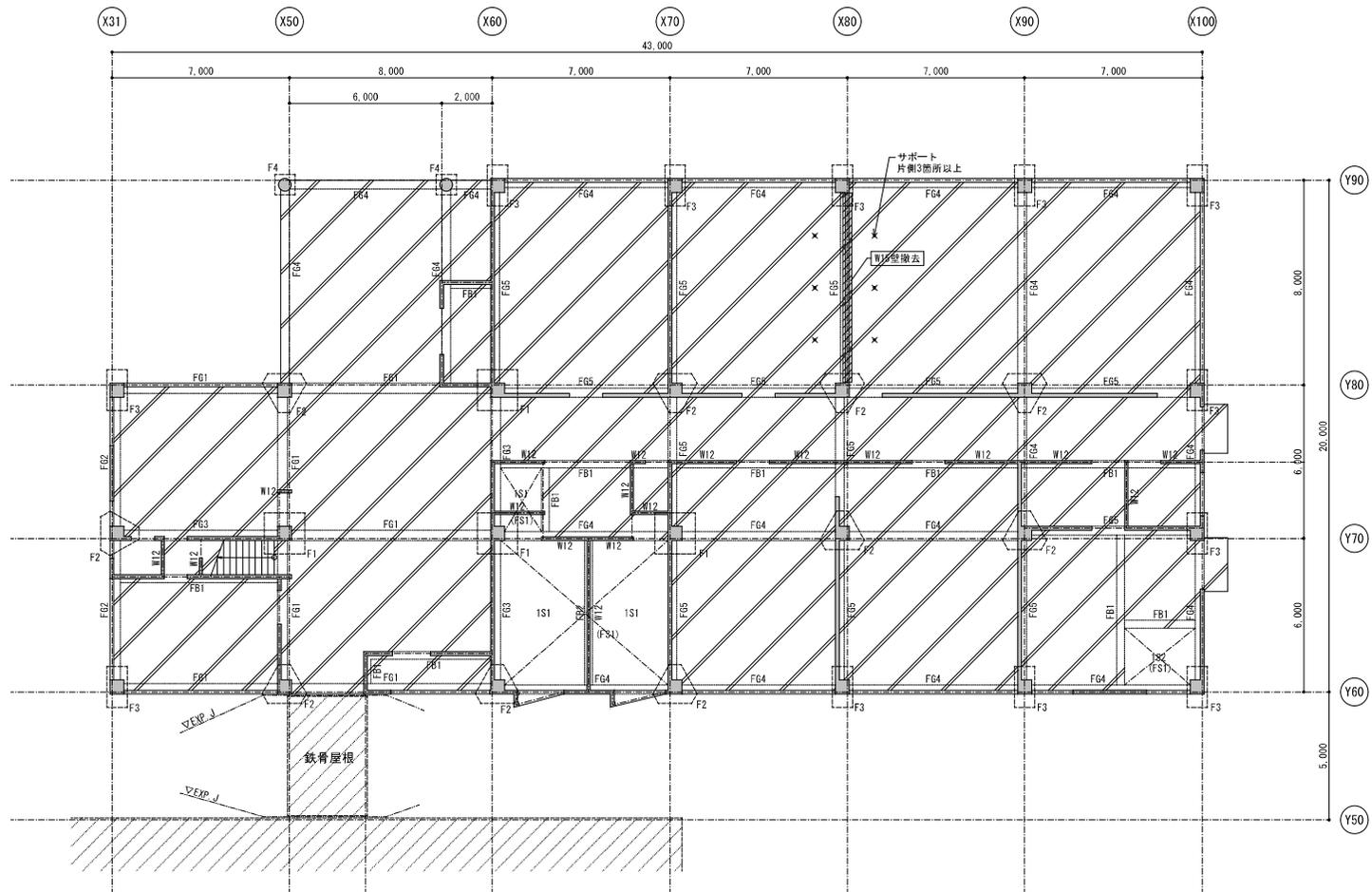


- (注) 1. *印は、スリットを施工する機械器具により必要な最小寸法とすること。
 2. スリットは、スラブ上端より100mm上がり又は、下端より100mm下りの範囲で設ける。
 3. 外壁面のスリットは、止水対策を行うこと。

RC5 既存壁の撤去要領図



(注) 1. 転倒防止対策に留意の上施工すること。



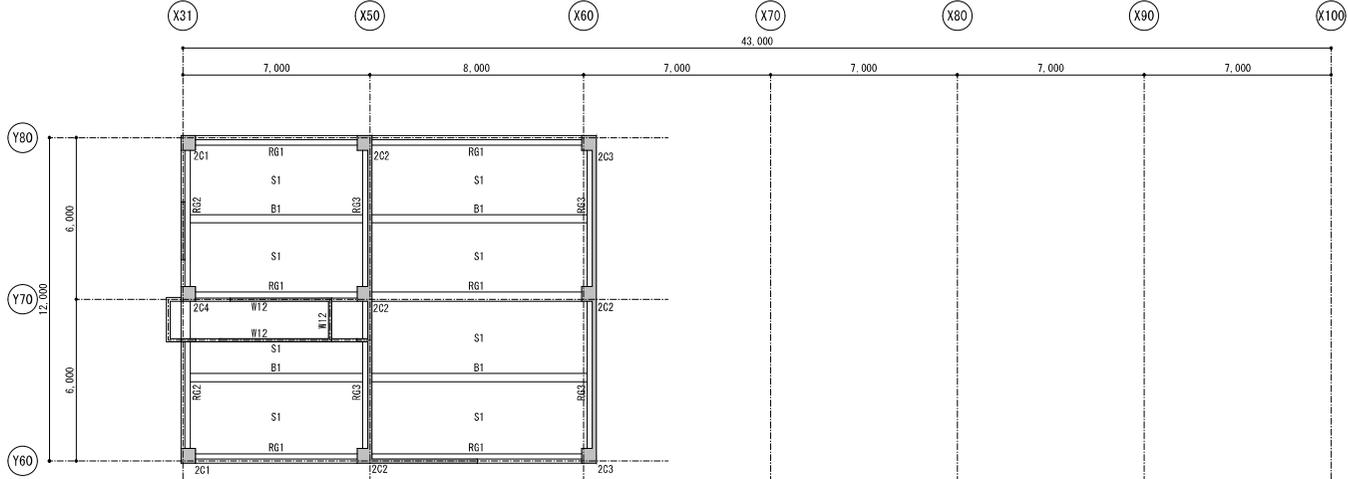
基礎伏図 1/100

- (註) 特記無き限り
1. 壁 W15
 2. 地中梁天端 GL-100
 3. 土間コンクリート
 4. 基礎底 GL-1,500

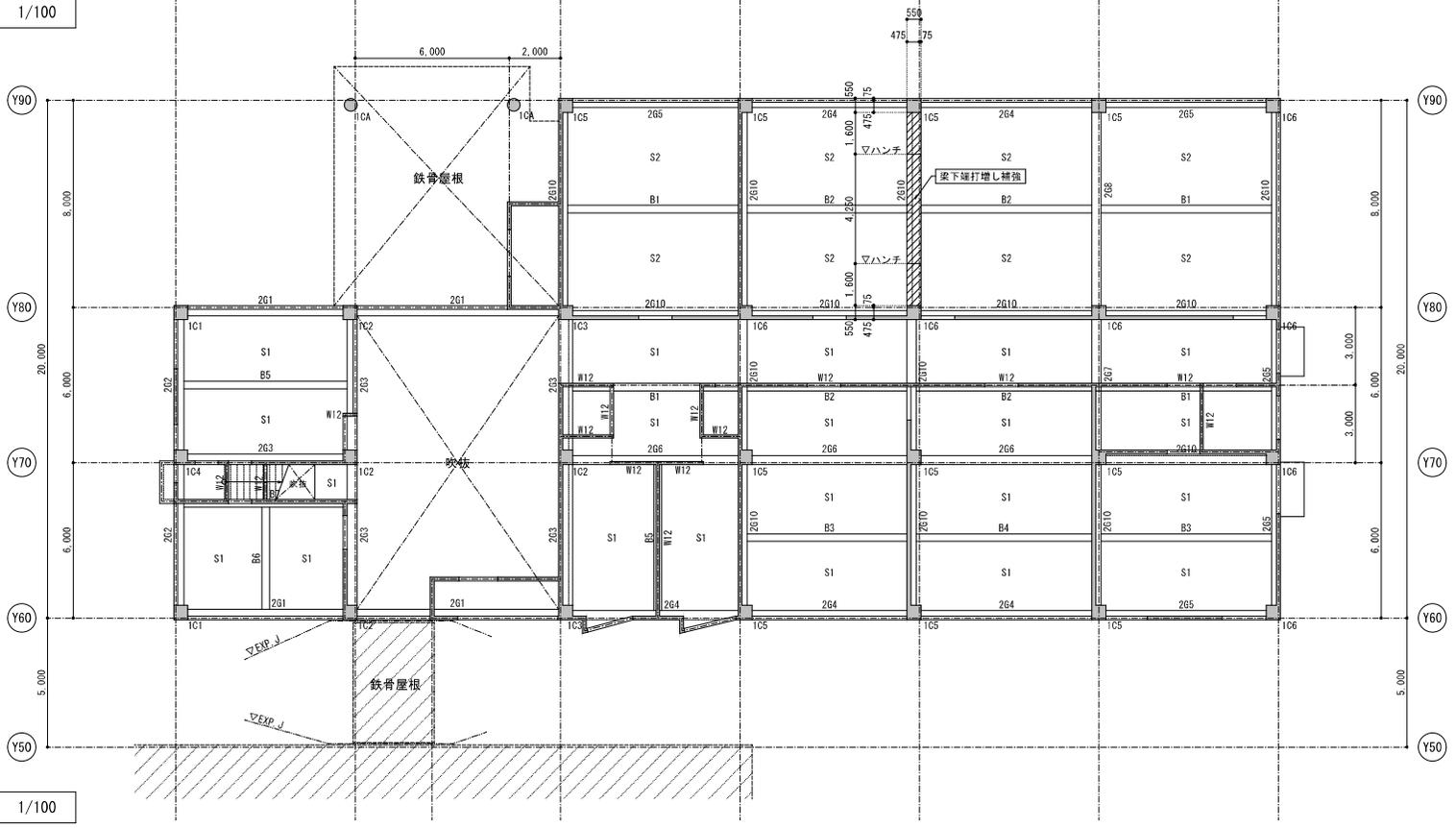
株式会社 海渡設計 一級建築士事務所
 福岡県知事登録第1-30027号
 代表取締役 野田知伸
 管理建築士 神崎健二 一級建築士 第323073号

工事名称
 総合福祉会館改修工事
 刈田町 福祉課
 福岡県東郷郡芳田町宮久1-19-1

図面名称
 福祉棟 [撤去図] 基礎伏図
 縮尺
 A1: 1/100
 A3: 1/200
 図面番号
 S-05



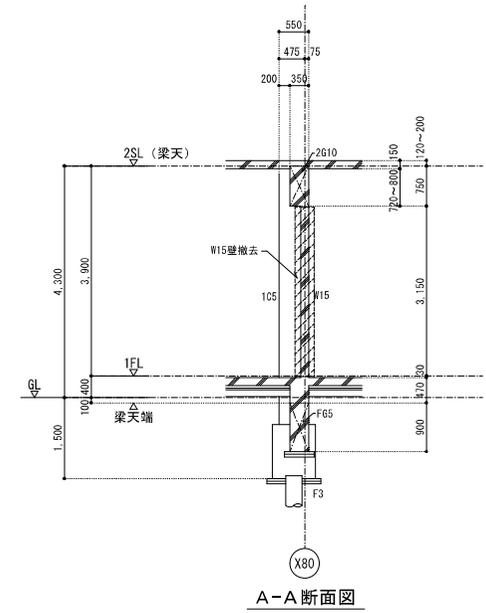
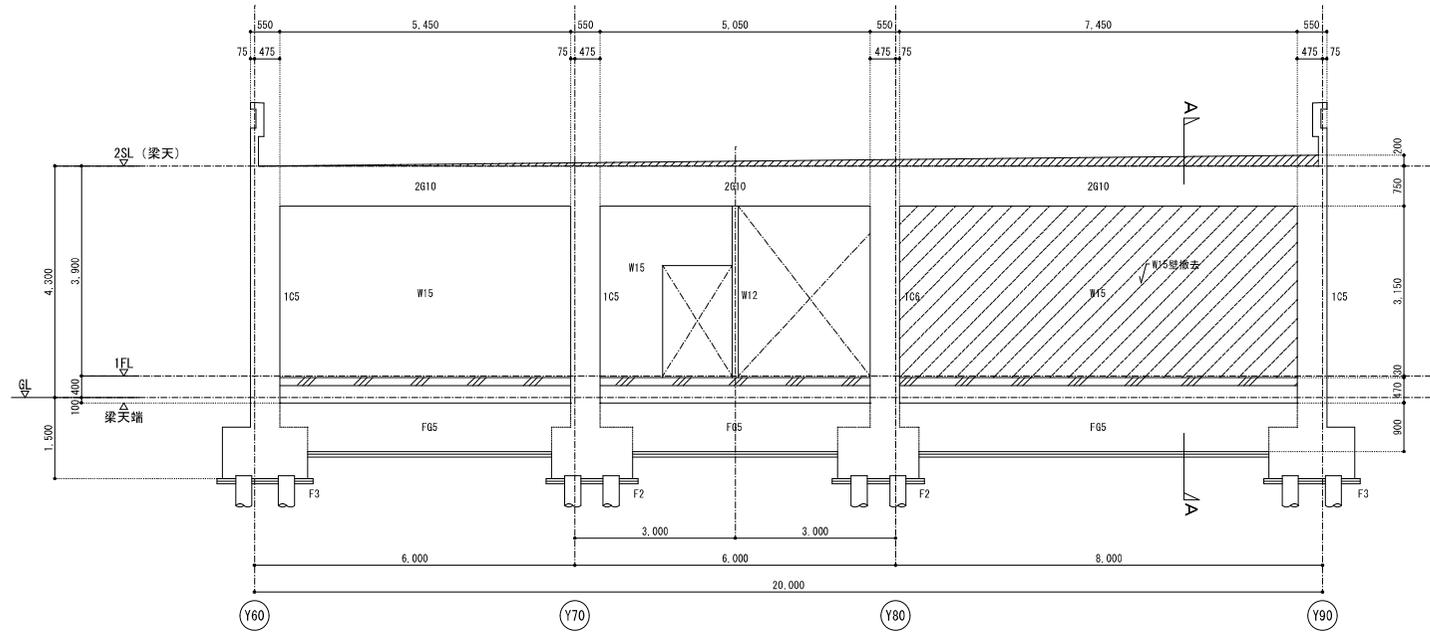
屋根伏図 1/100



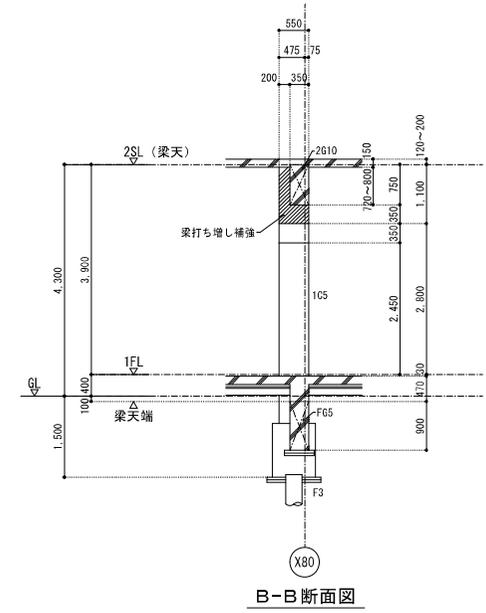
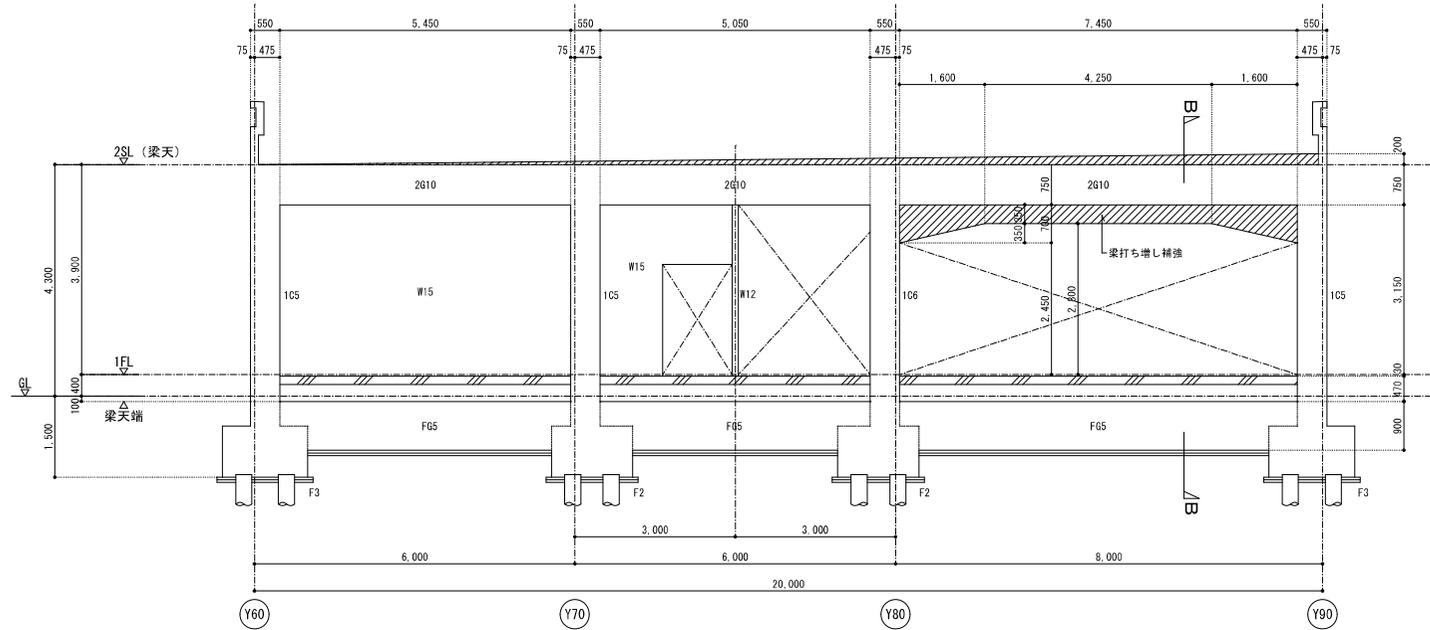
2階伏図 1/100

(註) 特記無き限り
1. 壁 W15

撤去図
福祉棟 X80通り軸組図 S=1/50



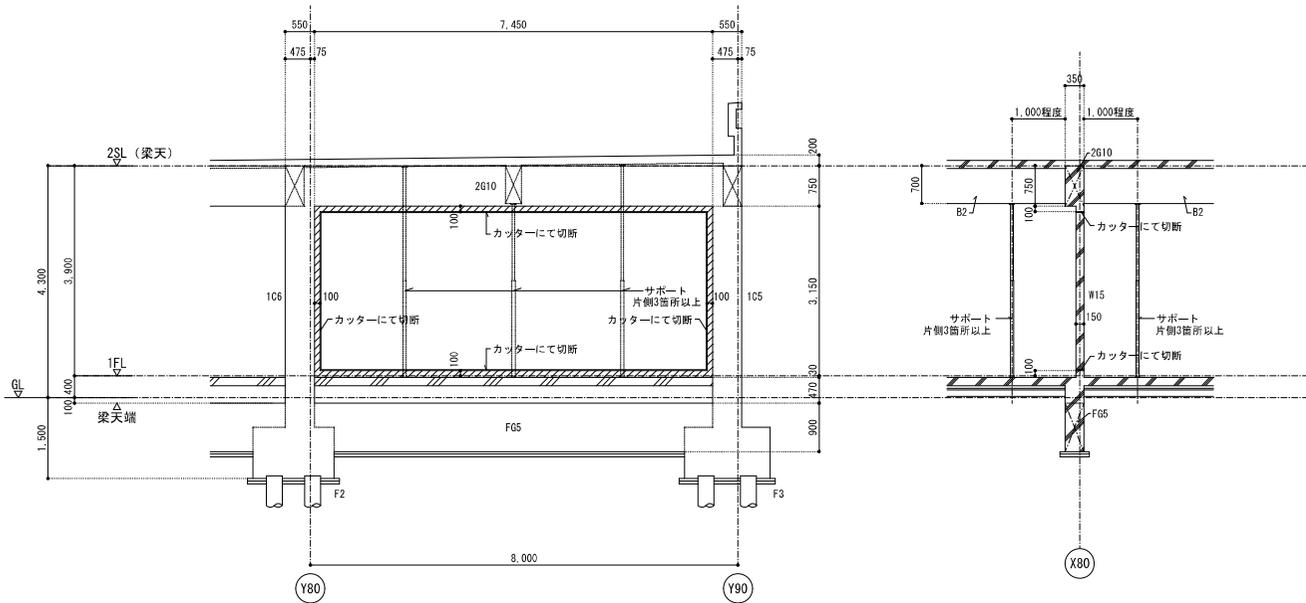
補強図
福祉棟 X80通り軸組図 S=1/50



株式会社 海渡設計 一級建築士事務所
 福岡県知事登録第1-3002号
 代表取締役 野田知伸
 管理建築士 神崎健二 一級建築士 第323073号

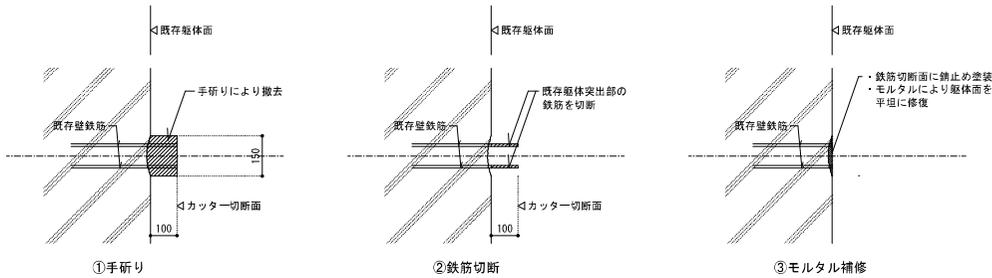
工事名称
 総合福祉会館改修工事
 町田町 福祉課
 福岡県荒瀬町井田町宮久町 1-10-1

図面名称
 福祉棟 X80通り軸組図
 縮尺
 A1: 1/50
 A3: 1/100
 図面番号
 S-08



壁切断位置図 1/50

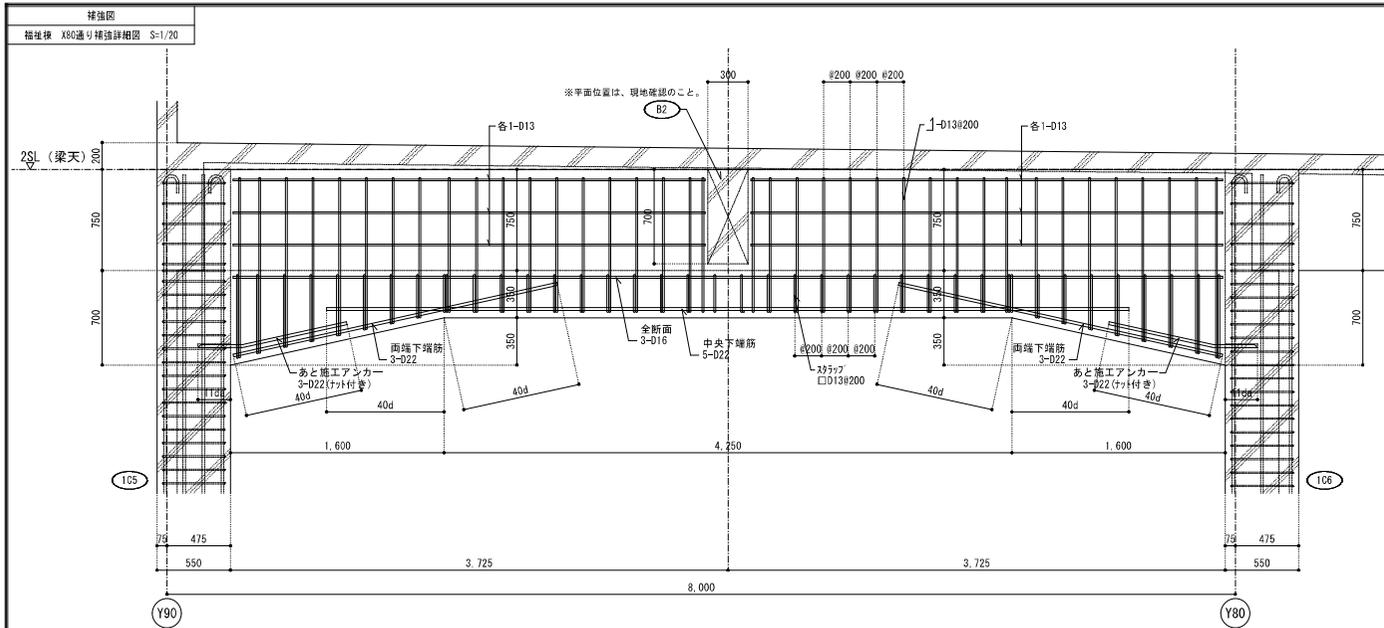
※サポート設置は、補強部コンクリートの強度確認までとする。



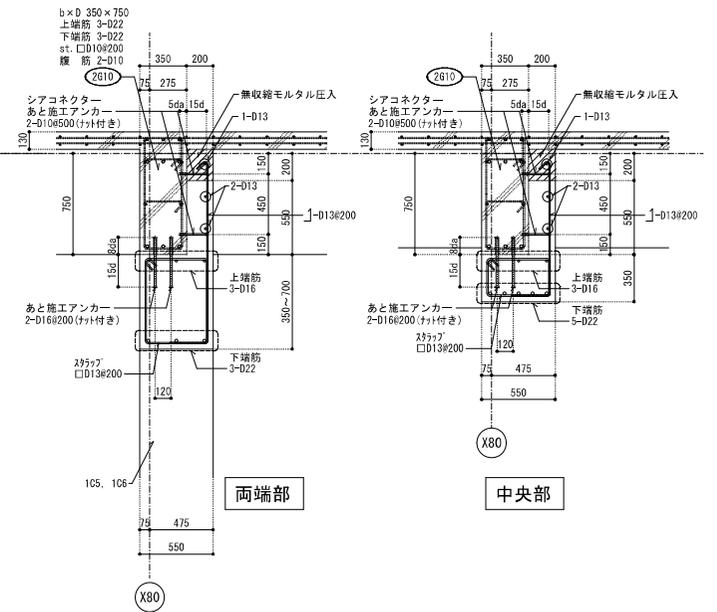
壁切断面処理要領 1/10

※施工箇所は、柱面・土間床面・梁下面とし、補強範囲（梁下面及び柱面の一部）についての②③の工程は、不要とする。

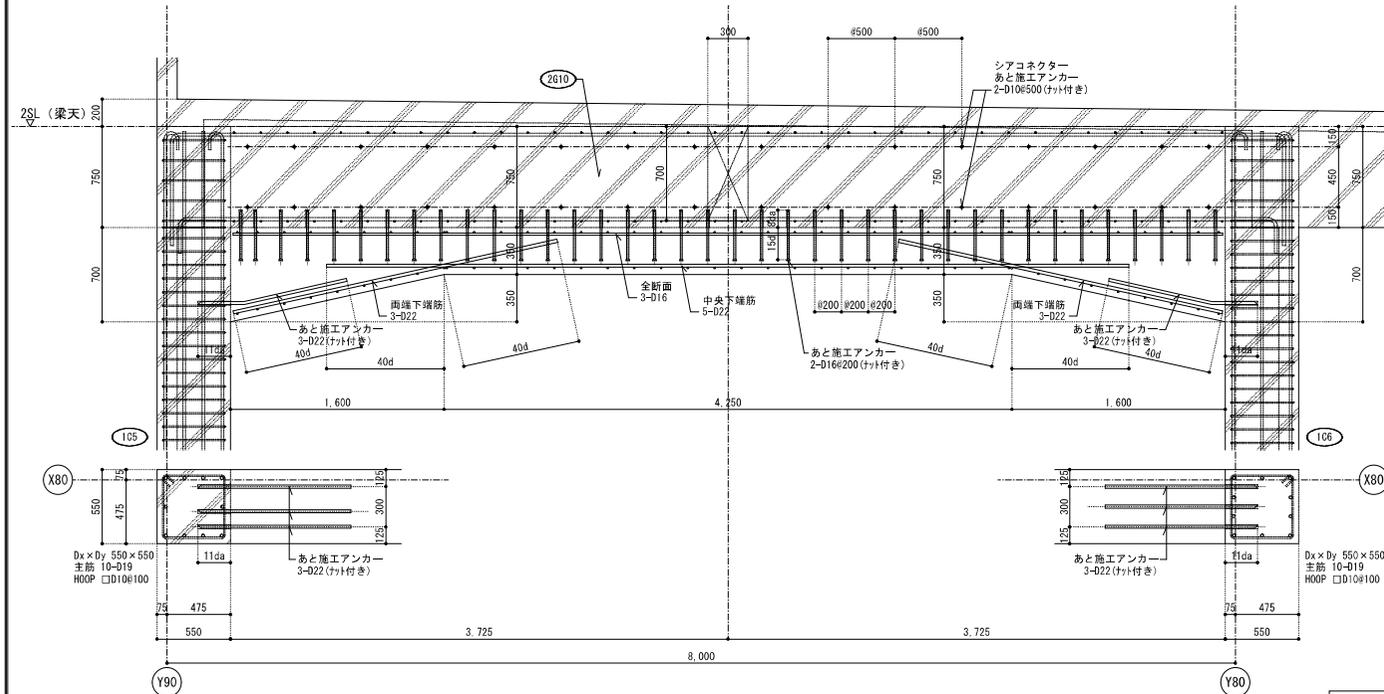
株式会社 海渡設計 一級建築士事務所 福岡県知事登録第1-30027号 代表取締役 野田和伸 管理建築士 神崎信二 一級建築士 第323073号	工事名称 総合福祉会館改修工事	図面名称 福祉棟【撤去図】壁撤去要領図
	図面番号 福祉棟 撤去図 S-1/100	縮尺 A1: 1/50, 1/10 A2: 1/100, 1/20



打増し補強筋配筋詳細図 1/20



打増し補強断面詳細図 1/20



あと施工アンカー配置詳細図 1/20

■あと施工アンカー埋込み案内 ■コンクリート及びモルタル圧入要領図

(1) 下部コンクリート流し込み (2) 上部グラウト材注入

- 一般仕様（梁打増し補強）**
- あと施工アンカー 接着系アナー（カプセル型、回転打撃方式）
 - コンクリート $F_c=21N/mm^2$ スラブ18cm
 - 無収縮モルタル $F_c=30N/mm^2$ (28日強度)
 - 鉄筋 SD295: D10~D16 SD345: D19以上
 - あと施工アンカーの同着力検査
アンカー強度の2/3を確認強度とし、抜け出しなど急激な剛性低下がないことを非破壊試験（引張試験）にて確認する。
アンカーの確認強度は、以下とする。
(アンカー径) (アンカー強度) (確認強度)
D10 20.9 kN 13 kN
D16 47.2 kN 32 kN
D22 133.5 kN 89 kN
 - その他
 - 材料加工に際しては、現場寸法実測の上、監督員の承諾を得て行うこと。
 - 補強部と既存コンクリートとの接合面は、目荒らし、水湿しを行うこと。
 - 事前調査にて柱・梁径寸法を測定すること
 - あと施工アンカー配置寸法は目安であり、鉄筋探索により既存鉄筋を避け位置で決定すること。